

エールフランスとペンギンの記 (2008年9月20日～26日)

飛行機の機器故障で出発が23時間遅れになった顛末。今回の報告は出発初日に尽きる。僕の旅行記はめったに写真を使わないが、今回ばかりは写真で伝えます。記憶の限り。

9月20日(土) 快晴

この日は成田 10:00 発のエールフランス機 AF279 に乗るはずだった。結果的にこのフライトはキャンセルになり、翌朝 9:00 に AF279A 便として再出発になったのだった。

搭乗口 15 番に到達するまでは順調だった。いつも通り搭乗口前は乗客であふれかえっていた。今日も満席なのだろう。予定されていた搭乗開始時刻になってもそのアナウンスはなく、少し経って機体整備のため搭乗開始が遅れるというアナウンスを聞いても、何ら不安は抱かなかった。20 分か 30 分ほどして同じアナウンスが繰り返されるのを聞いて、待っている乗客の間で苦笑が漏れる程度だった。

しかし、しばらくしてさらに同じアナウンスが聞こえて来た時は「はあ？」という、ようやく自分たちの乗る飛行機に何かが起こっているらしいことに気付いた声と、少しのざわめきがおきる。「まだ待つのか？まあ、いいけど」という表情だ。しかしその直後のアナウンスを聞いて、それまで隣同士しゃべっていた声が一瞬止み一斉に上を向く。そのアナウンスは、次の便である 11:00 発 AF271 便の搭乗開始を告げたからだ。後続便に追い抜かれることになった。

もうしばらくお待ちを、のアナウンスの間隔は徐々に広がり、待っている乗客は苛立つか、待ち疲れてため息をついていたとき、確か 12 時頃だったと思う。ついに最終アナウンスが来た。「本日の AF279 便は欠航とします。」

出発前の機体点検中に不良が見つかり、本日には修理できないことが判明。乗客は驚き、そしてどうしてよいのかわからない。僕のような個人客は自分で対応を考えればいいのだが、団体旅行客はどうするのだろうと、不思議なことに他人のことが気になる。回りは一斉に立ち上がり、ワイワイガヤガヤ。

僕の横に立ってさっきから何やら忙しく電話していた中年男性は旅行社の添乗員だった。このような事態になることも想定内だったのだろう。彼の回りに群がる旅行者にテキパキと善後策を説明していた。プロですねえ。

フライトがキャンセルになって、で、われわれはどうすればいいのかのアナウンスまでにしばらく時間がかかった。この間に僕は会社へ連絡。「緊急」事態でもないのだが、緊急時連絡網のコピーをいつも財布の中に入れておいて助かった。事務方に事情を説明。一日遅れるが業務に支障はない、と形式的な説明も忘れない。実は余裕をみて一日早めの出発なのだ。出席してもしなくてもいい現地での事

前打合せに参加できなくなるだけなので、コアの部分の仕事に差し支えない…云々と。

さて、さらにアナウンスがあった。飛行機がこの後何時に飛ぶのかわからない、少なくとも本日中ということはない、待機する客のためにホテルを用意した、今からバスでそこへ向かう、係員に従って駐車場へ移動しましょう、と。

例の団体旅行客がどうしたのかは知らない。けれども、こういった事態に会社側の対応者に噛みつく人は必ずいるもので、若い男性がひとり係員に毒づいていた。対応に何か不備があったのやも知れないが、叫んでも解決しない。ああいう情景は悲しくなる。

今回の渡仏はフランスの会社からの依頼出張で、ビジネスクラスを宛がってくれた。ここから翌朝の特別便搭乗まで、ビジネスクラスとエコノミークラスとの扱いがこうも違うものかと思った。

まずここ 15 番ゲートから空港ターミナル外の駐車場に抜けなければならない。係員に誘導されるのはビジネスクラス客優先で、僕は真っ先について行く。なるほどと気がついたのだが、一旦出国手続きをしている、つまりパスポートに「出国」とスタンプされているので、これを取り消さないといけない。このスタンプの上から「VOID」というスタンプが押される。これで出国は取り消し。国内に戻った。

空港建屋内のどこをどう通ったのかわからなかったし覚えてもいないが、いつの間にまぶしい午後の陽光注ぐ屋外へ出、通路をくねくねと駐車場へ。ここでバスが何台も待機していた。僕は係員につかず離れず付いていったので他の乗客が後ろでどうなっているかわからないが、おそらくは 2,3 百人の客がぞろぞろと列をなして歩いているのだろう。もちろん一旦預けたスーツケースは別途バスへ運んでくれた。

バスの中で通路を挟んで反対側に座った、同年代に見える男性に話しかける。「どうなるんでしょうね。」

話しているうちに全乗客が乗り終え、いよいよホテルに向かって出発。だが、どこの何というホテルかは知らされていない。(あるいは記憶違いで、バスの中で知らされたかも知れない。) 空港の近くのホテルかと思っていたら違うようだ。バスは快晴の東関東自



動車道を東京方面に向かって延々と走る。隣の人は結構国外のいろんな所へ旅行をしているよう。

この間に知った彼の今回の渡仏目的はこうだ。

- 彼は弁護士である。今回はパリ経由でイランへ飛ぶ。
 - 彼は、日本の法律を知らずにヤクを持ち込んでしまい、逮捕されて千葉に収監されている 20 才のイラン人青年の弁護を引き受けている。逮捕時に 100 キロもあった体重が、宗教上の制約のある食生活を考えてくれない日本の留置場のせいで 60 キロまでやせてしまった。社会派弁護士たる彼は、このような非道な扱いを許した日本の留置制度を放っては置けない。
 - 弁護を担当するには十分な情報が必要である。当人が生まれ育った生活環境や教育、風土などを現地調査することとした。
 - そこで向こうにいるイラン人弁護士と日本人弁護士、それと彼、合わせて 5 人で 2 日間に亘って生まれ故郷を訪問調査することにした。
- …そういう出張用務もあるのか…。

バスは小一時間走り、到着したのは東京ディズニーランドの前のシェラトン・グランデ・トーキョーベイ・ホテル。ディズニーランドへ行ったことがないので (茨城県人としては希少種らしい)、どんなホテルがあるかも全く知らなかった。シェラトンがあると今回初めて知った。

さて、ここからが今回の旅行記のトピックである。全 8 ページのうち 4 ページをその顛末が占める。

ホテルではエールフランスから連絡を受けた何百名かの突然の宿泊に対応して、臨戦態勢が敷かれていた。ロビーには専用の荷物置き場が設けられ(その後いつの間にかバスから降ろされた我々の荷物がそこに並べられていた)、ホワイトボードには手書きで宿泊手続きやその他食事場所などの情報、そして肝心の翌朝のパリ行き特別便の出発時間がデカデカと書かれていた。

このときすでにフライトがスケジュールされていたということは、機体整備の目鼻が立ったということなのだろう。空港の 15 番ゲートで搭乗の遅れをアナウンスしつつ故障修理をし、原因がわかったものの直ぐには直らない、しかし翌朝再出発には十分間に合う、という判断がされたのだ。

ホテルロビーには即席の受付机がふたつ置かれ、ここで今晚の宿泊のチェックインをする。私と先の弁護士の方がひとつの机に並んだところ、係の女性が「まだ全員分の部屋数を確保できていませんので、今のところ、どなたかと相部屋でお願いしたい」と。そんな話は聞いていなかったが、他に知り合いがいるわけでもなし、乗客の中で相部屋を希望したい相方を物色していたわけでもなし、すぐ後ろで今の話を聞いていた当の弁護士の方と一緒にするのは厭だと云い張る合理的理由は見つからず、そのままわれわれふたりが相部屋となるのが最も自然だった。係の人

は後で部屋が確保できれば個室に致しますと。それに希望を託そう。

案内された部屋は、この豪華なホテルの中のいわば家族ゾーンにある。それでひとつの別館のようなものだ。ロビー奥のエレベータに乗ったままは何の変哲もない。しかし 8F でドアが開いたとき眼に飛び込んできたのは、次の風景だった。



エレベータを出て後ろを振り向けばそこにはペンギンの絵が。

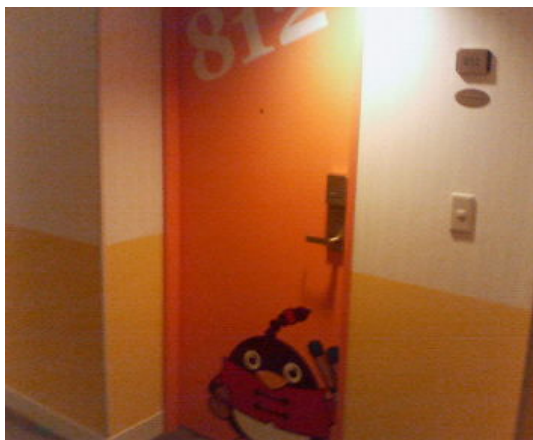


キョロキョロしながら廊下を歩くと、廊下も床もペンギンだらけだ。





そして辿りついた僕らの部屋のドア。ペンギンが迎える。



やれやれ。大の男二人が、決して嬉々とはしていないが、連れ添ってこの部屋へ入っていく図はみっともないものじゃないな。

まさか部屋の中はこんなことはないだろう、とはやっぱり思えないよな、と思いつつドアを開けると、期待はやっぱりはずれず、部屋の正面奥に見えたのはペンギンの背もたれのソファふたつ。



部屋を見回しながら、言葉少なに荷物を置く。この部屋にふたりでチンとしているのは避けたいので、早速先のロビーの階に戻って昼食。大きなフロアでビュッフェスタイルだ。恐ろしくメニューが豊富。食い意地が張っている僕は片っ端からと思うが、彼

は小食らしい。思わず控える。

名刺を交換。この人、Sさんは、東京の新橋に事務所をもつ弁護士で、第二東京弁護士会の副会長とのこと。副会長とは大変な要職とは思いますが、Sさんによれば、会長は一人で偉い人になるが、副会長は6人も居て持ち回りだとか。おまけ東京には東京弁護士会と第一東京弁護士会と第二東京弁護士会との3つの弁護士会があって、副会長は大勢いると¹。

ペンギン部屋に戻る。今夜の宿と再出発のめどという目の前の問題が一通り落ち着き、各々の用事に掛る。彼は携帯電話で事務所やパリに連絡を始め、そのうちロビーへ行くと云って部屋を出ていった。

どうも今回の彼の用務は、5人で現地を訪ねるものの、Sさんが筆頭で、彼の訪問を前提にスケジュールを組んだらしい。現地に2日間滞在する旅程なのだが、肝心の彼が1日遅れで1日しか滞在できないのでは意味がないので、この状況に至っても現地訪問を強行するかどうか同行者と相談するのだと。僕はパソコンをつないでメールチェックなど。

ベッドはもちろん壁の絵もペンギンである。



洗面所でもお出迎え。



¹ (Wikipediaより) 東京都には、日本に52ある弁護士会(単位弁護士会)として、東京弁護士会(弁護士5,458名)、第一東京弁護士会(2876名)、第二東京弁護士会(3351名)が存在し、所属する法律事務所が東京都内にある弁護士は、この3会のいずれか1つに所属する必要がある。会のあり方をめぐる考えの違いにより3会に分裂したらしい。

間もなく彼が戻って来た。部屋を確保できたのだと。えらい！そうでなければ上のペンギンベッドの部屋に彼と二人で泊まることになっていた。彼の新しい部屋は同じ階の、ここは反対側の端っこに近いところ。彼は荷物を持って移動。

その後僕はもうしばらく仕事をした後、暗くなってから携帯電話の充電器を探しがてらホテル内見学。といってもロビーと 2F 辺りだけだが。子供用は僕らの「別館」だけで、その他はさすがのシェラトン、威風堂々とし、庭園なども広々としている。もちろん手入れは行き届いている。高級感が漂い、大人のホテルである。ディズニーランドは子供だけのものではなく大人も遊べる、そしてホテルでは大人は当然大人向けのサービスを求める、ということか。

コイン式の充電器というものを初めて使った。電話機本体からバッテリーを取り出して、なんだかゴツツイ感じの箱に吸い込まれて 20 分も経つと充電完了。このころはまだ海外でも使える携帯電話を持っていなかった。海外用は成田空港でレンタルした。バッテリー切れは普段使っている国内用。どうせ出発前と帰国後に国内でしか使わないのだからと充電器を持ってこなかった。それがこういう事態になり、あちこち電話しなくてはいけない羽目になって一気にバッテリー切れ。

夕食へと、昼食と同じビュッフェスタイルの“グランカフェ”へ。Sさんと顔を合わせ相席することに。昼もそうだがここでも何を食べたかさっぱり覚えていない。でもメニューは豊富で、どれもおいしい。ここは家族で来てあれもこれもと賑やかに食事を楽しむところなのだ。

後でホームページを見て知ったのだが、このビュッフェ、朝食 3,300 円、昼食 3,500 円、夕食 5,200 円。いつも使うようなビジネスホテルとは違うんだ、こんなに豪華なのだったらもっと食べればよかったと貧乏性。

Sさんとは、最近気になっていた、DVが原因で離婚した女性の知り合いのことを聞いた。同じ社内内で元夫が接触できないよう元妻の居場所は知らされないが、同僚がうっかり（それこそ酒の席でも）しゃべってしまうこともあり得る。そのような場合法的にはどうなるのか、という素朴な疑問。彼の答えは、もし元妻が漏らした同僚を訴えたとして、その同僚が課長など人事権を有している社員の場合は何らかの法的処置が適用されるのではないかとのこと。人事権とは責任重大ですな。

彼の部屋もまたペンギン漬けらしい。軽い夕食を終えて彼の部屋へ案内される。僕の部屋とは廊下の反対側で作りがやや違う。大きな窓からはディズニーランドの夜景が見えて「ホウ」。部屋とバスとの間の壁もくり抜かれていて、その扉にもペンギンの絵だ。しかしこのくり抜きは何のためだろう。湯気が室内に入ってくるゾ。



次の写真は、自分の部屋へ戻る途中の廊下の案内表示。案内もペンギンがする。



こうして、振り返ってみれば大笑いの一日が終わる。いつ耳にしたのか忘れたが、エールフランスは部品をフランスまで発注して取り寄せたとか。フランス発東京行き便に載せたのでしょね。一日あれば十分間に合う。予備にひとつくらい置いておけばいいのと思うのは日本人だからだろうか。

それにしてもエールフランスとホテルの対応には恐れ入る。欠航やむなしと判断した次の瞬間には、数百名移動用のバスとホテルの部屋の確保に動いていたわけだ。航空会社もバス会社もホテルもこういった不測の事態への対応体制はすでに確立しているだろうから、ある程度はマニュアルに即して動き、細部は個別事象対応といったところか。

9月21日(日) 快晴

朝6時にバスでホテルを出、成田空港へ7時頃到着。この時間の出発便はないらしく、どのチェックインカウンターは開いていないし、出発ロビーには乗客はいない。エールフランスのカウンターにだけはバスから降りたわれわれが長蛇の列をなしている。

弁護士のSさんは今朝も関係先と連絡を続けていたらしく、バスから降りてから列に近づきながら携帯電話で話していたが、まもなく決着。今回の出張はとりやめになった、このまま帰宅しますと。

結局彼にとって昨日の丸々一日はただ無駄になってしまったわけだ。彼の自宅は千葉市内だと云っていたから、昨朝彼は自宅を出て成田空港に到着し、成田空港からディズニーランドへ移動して一泊し、翌日成田空港へ引き返したもののその足で千葉市内へ帰宅と、二日に亘って県内中央部を行ったり来たりしていたのだ。

チェックインの際、「ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした」と係員からきれいな小袋を渡された。チョコレートだった。ビジネスクラス客だけのようだが、そこまで気を遣わなくていいのにねえと思う。まあ、これもマニュアルのうちなのだろうが。

こうして成田空港の新しい1日が始まり、われわれの便はAF279A 特別便として今度は9:00 ちょうどに無事出発。昨日出発予定だった団体観光客はどうなったのだろうか。旅行をあきらめる人もいるだろう。補償はどういった保険で賄うのだろうか。補償してくれるだけでも有難いと云えば有難いが。

帰 国後間をおいてこの記を書いているので、機内でどう過ごしたか、ほとんど覚えていない。観た映画は『インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国』(2008; Harrison Ford, Cate Blanchett)。他に記憶にあるのは、午後4時過ぎ、日がまぶしいシャルル・ド・ゴール空港に着き、迎えに来てくれるはずの Delphine (デルフィーヌ) の姿が見えなかったことか。ターミナル 2E の待合場所のようなところで待っていたらまもなく現れた。

今日の僕の宿泊場所は、パリ市の西南の郊外にある研究所近くのホテル。そこで夕食をとればいいので、それまでの時間デルフィーヌとパリの街中で過ごそうと約束していたのだ。駐車場で彼女の車に乗りパリ市内へ。車の中でサクレ・クール寺院 (Sacré Coeur) へ行こうと決める。例によって自分の庭のように動き回り、何とか1台分のスペースをみつけて天才的な縦列駐車をする。

特段の当てもないがサクレ・クール寺院。坂道の途中で風車を指差して「ムーラン」と言っていたようだが、フランス語でそういう意味だったのか²。

日曜日の夕方、世界的な観光地は人であふれかえる。例の画家たちが集まる広場もごったがえしていた。デルフィーヌが、エッフェル塔を描いた木の切れ端を日本人のおじさんから買ってくれた。€20 也。サクレ・クール寺院の正面の階段は、楽器をかき鳴らすにわか大道芸人の演奏と、それに反応し喝采を送る階段に座り込んだ観光客という、写真でお馴染みの風景。

雑踏を抜けて来た道とは違う広い道を降りる。途中小さなギャラリーへ寄り、そして今度少し坂を上がったところの突き当たりにあるパブへ。ここでビールを飲もうと外のテラスの丸テーブルに陣取る。

ここで彼女たち一行がアメリカへ行ったときの

話。一行とは彼女のボス (正確には違うと彼女は言うのだが) であるクリストフと、彼女の同僚の女性二人の合計4人。ホテルを予約せずに行き車ホテルを探すことに。なかなか部屋が見つからず、ようやくモーテルに一部屋だけあった。つまり男ひとりと女3人で一部屋になる。クリストフはフランスにいる奥さんに電話して事情を話して宿泊することに。大らかですなあ。フランスでは友人同士の男女が同じ部屋に宿泊する、特段の関係もなく、というのが珍しくない聞いたが。

グラス一杯ずつのビールを飲み、暗くなりかけた頃、デルフィーヌは今度ははるか西南方向の郊外のホテル NOVOTEL へ送ってくれた。

チェックインし、部屋に荷物を置き、ホテルのレストランへ夕食をとりに行く。見れば一角のテーブルで男ばかり数人が談笑している。見たことがあるようなないような、確信がないながらも近づいて挨拶をすればまさしく彼らが明日、明後日と一緒に仕事をする仲間だ。それぞれに皆その道の専門家で、僕はもはや今から緊張する。

なかに二人、昔カナダで知り合った人がいた。Lawrence Johnson と David W. Shoemsmith だ。Lawrence Johnson は今スイスで、Shoemsmith はカナダのウェスタン・オンタリオ大学で教えている。なつかしかった。Shoemsmith はこの後2,3度メールのやりとりをした。その他のメンバーは、スウェーデン、フランス、ベルギー。

9月22日(月) 晴れ、くもり

一日中ホテルの会議室で仕事。

フランスだから休憩時間は長く、何種類ものの飲み物とチョコレートなどのお菓子が用意してある別室でとなる。その休憩の間も英語で会話をしなければいけないのがつらいのだが。

ここで初めて Nespresso[®] (<http://www.nespresso.co.jp/>) のコーヒーマーカーを見かける。日本の家庭用を一回り大きくしたくらいの大サイズのコーヒーマーカーで、ファミレスにあるような、注ぎ口から煎れたばかりのコーヒーがカップに出てくるタイプだが、コーヒー豆は別に直径5cm くらいの皿のような形をしたパックに入っていて、これをそのままコーヒーマーカーのスロットに入れる。パックにエスプレッソ他の豆の種類がある。進化を続けますねえ、コーヒーマーカーは。安いのは2万円くらいからあるらしい。少し考えよう。

夜は例によって会食。

9月23日(火) 曇り

この日も会議で缶詰。夕方に解散。

ベルギー、カナダ、スイスのメンバーは僕と同じく今晚もう一泊する。7時半にホテルのレストラン

² 辞書で調べたら確かにそうだった。英語で mill。

で夕食と約束し、一旦部屋に戻ってベッドにゴロンと横になったのがまずかった。眼が覚めたら8時過ぎだった。慌ててレストランへ向かう。近づいたら、トイレに立った Shoemsmith がすれ違いざまに「寝過したろ」。

この日はカレー味のする何かを食べた。カレー味なんて珍しいと思った。まあ微かにしたね。

このホテルは研究所近郊の小さな村にある3つ星ホテルで、利用者はほとんど研究所関係だ。そう思っていたが、HPによると、NOVOTELとしては、そのような特殊な目的ではなく、一応は郊外のレジヤホテルと位置付けているらしい。しかし、旅行前に宿泊者の厳しい意見をウェブで見かけてしまった。曰く「家族で宿泊したが、子供用の遊具は壊れかけていて危険で、プールは掃除が行き届いていなくて汚い。食事ときたら、何とかのスパゲッティを頼んだが冷めていて最悪...。」しかしさきほどHPを見たらその後の宿泊客の感想はかなりいいので、遊具とプールは改善されたのだろう。

9月24日(水) 快晴

朝、ホテルでタクシーを呼んでもらい、デルフィーヌの会社へ向かう。今回もやっぱりタクシー運転手は正門までたどり着けない。この辺りへはRERを使ってFantenay-aux-Roses(フォンテ・ネ・ローズ)駅で降りるか、バスで行くかしかないのだが、面倒なので今までタクシーで行ったことしかない。だから道を覚ええない。途中で僕の携帯電話を運転手に渡して直接デルフィーヌから道案内をしてもらった。

デルフィーヌと2時間ばかり仕事の話をし、この日は昼食の誘いは断って退散することに³。

パリ市内へ戻るためにタクシーを呼んでもらった。正門前で待っていたら間もなく来た。この運転手は道に迷わなかったようだ。タクシーで一気に北上、パリ市内へ突入。どの道を通ったか覚えていないが、運転手も少々迷いながらパリ9区にある今日のホテルへ到着：

Hotel Du Square d'Anvers
6, place d'Anvers - 75009

まだ3時頃でチェックインには早すぎた。荷物を預けて一旦外へ出る。ホテルの回りをぐるりと歩く。ホテルの北側に位置するBoulevard de Rochechouart(ロシュシュアール通り)はメトロ2号線が走り、西の方へ行くとムーラン・ルージュがある結構賑やかな通りだ。地図を見ると結構パリ市内の北側で、何のことはない、サクレ・クール寺院から降りてきたところにあたる。

戻ってチェックイン。ホテルの部屋は日本で言う

2F。こちらでは1F。階段を上った正面だった。エレベーターもあったが、パリのホテルによくある実に狭いエレベーターで、荷物があるときは出入りに窮屈なやつだ。ホテルもだが部屋も古い。が、部屋の木造のベッドやロッカーはそれなりに趣があつていい。余計なものはない。バスとトイレは新しく当たり前にお湯も出るので何ら文句はない。

さて街中をブラブラしよう。最終目的地は、バスチーユにあるいつものクスクス屋さん。そこで夕食。その他はセーヌ河畔沿いの出店を冷やかすくらいで、あとはアテもなく気の向くままである。地図を辿る：

トリュディーヌ通り(Av Trudaine)を西へ、
マルティユル通り(Rue des Martyrs)を南へ、
ロレット・ノートルダム寺院にぶつかり、
サン・ラザール通り(Rue Saint Lazare)を西へ、
サント・トリニテ教会にぶつかり、
シャトーダン通り(Rue de Chateaudun)と合流したサン・ラザール通りをさらに西へ、
サン・ラザール駅を右前方に見ながら(駅構内
の見物は次回にしよう)、
アーブル通り(Rue de Havre)へ左折して南下、
オスマン通り(Boulevard Haussmann)⁴を横切り

⁴ (Wikipedia記事を改編) オスマンはフランスの政治家。ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン(Georges-Eugène Haussmann, 1809-1891)。ドイツ語風に読めばハウスマン。セーヌ県知事在任中(1853-1870)に皇帝ナポレオン3世とともにパリ市街の改造計画を推進。この都市改造はフランスの近代化に大きく貢献し、現在のパリ市街の原型となった。

まず、入りくんだ路地裏をとりこわし、道幅の広い大通りを東西南北へと走らせた。また、凱旋門や広場から放射状に広がる大通りを建設。こうして交通網が整えられパリ市内の物流機能が大幅に改善された。また、セーヌ川中州のシテ島(ノートルダム大聖堂などがある)は、19世紀当時貧民窟と化していたが、架橋、道路建設などを通じて雰囲気を一変させた。その傍ら、新進気鋭の建築家を登用してルーブル宮、新オペラ座などの建設を進めた。

こうした首都の大規模な改造は、パリを訪れる各国の政治家を驚嘆させ、ナポレオン3世の威光を高めることに。街の景観を保つことにも配慮がなされ、建造物の高さは一定までに制限。上下水道の整備を進めた結果コレラ発生の抑止など衛生面でも貢献した。大通りに並ぶ街灯の数も増やされ、万国博覧会で訪れた日本人もその風景をたたえている。こうした一連の改造計画は「オスマン化」とも称される。この際の都市計画は、仏国内にとどまらず各地における都市建設の手本ともされた。

「オスマン化」の恩恵を受けインフラの整備が進んだパリ中心部と、そこから離れたパリ周辺部の居住環境に差が開いたため、富裕層が中心部に居住し、貧困層が周辺部に追いやられる「住み分け」が徐々に進展。富裕層の婦人などを購買層として狙って中心部にはプランタンなどの大規模店舗が次々に開店され、貴婦人が買い物を楽しむ習慣が形成され始めた。また、こうした大規模な都市開発事業は、当時盛んだった鉄道敷設とあわせ、多くの労働力が必要とされ雇用創出につながった。

³ 忙しいと云っていたから午前中の2時間ばかりで切り上げるつもりで来たのだ。でもまあ、彼らにとっては食事時間は別なんだろうね。ゆっくり食事をしたり休暇をとったりするために普段「忙しい」のだ。

(ここで左折すればプランタン、ギャラリー・ラファイエット、そしてオペラ座に至るが、そのまま直進し)、

トロンシェ通り (Rue Tronchet) を南下。

ここでマドレーヌ寺院の裏へぶつかる。ずっと前にはこの近くのホテルを定宿にしていた。高い地区に泊まっていたもんだ。回りにはフォーションがあり、エディアルがあり、マキシムがある。ロレット・ノートルダム寺院辺りからここまでメトロ 12 号線に沿って歩いたことになる。

それからコンコルド広場、そしてオランジェリー美術館へ立ち寄る。「オランジェリー」の名前の由来はナポレオン 3 世がオレンジの温室をここに造ったことらしい。モネの「睡蓮」が有名で、それしかないのかと思っていたら、モディリアーニやルノワールなど巨匠の作品も多数。結構観がいがあった。ミュージアムショップで数十 cm の長さの絵葉書と『パリを物語る建物たち』(Jean Daly 著、長谷川たかこ訳、PARIGRAMME 社、2001) を買う。

コンコルド橋をセーヌ河右岸へ渡って、ここから川面と出店を眺めながらテクテクと東に向かう。シテ島へはポン・ヌフ橋から入る。そうです、ジュリエット・ピノシュの映画『ポンヌフの恋人』で有名なあのポン・ヌフです⁵。途中の休憩所みたいなところに座っていたら、老夫婦のご婦人がフランス語で話しかけてきた。わざとポカンとしていたら英語で「ここは何と言う橋なんですか」と聞いているらしいので、「ポン・ヌフです」と。見知らぬ人に声を掛けられると一瞬身構えてしまう過剰防衛の悲しさ。

ポン・ヌフを渡りきらず、

シテ島北側のオルローージュ通りを東へ、

パレ通り (Boulevard de Palais) へ右折、

サント・チャペルを右に見ながら、左折して

パリ警視庁の北を抜け、

市立病院にぶつかって右折、

すぐに左にノートル・ダム寺院、

寺院入口に「ようこそ」と下手なひらがなが

書いてあるのを見、中をぐるっと一回り、

出たあと、寺院北側の人気の少ないクロワト

ル・ノートル・ダム通りを東へ、

サン・ルイ橋を渡ってサン・ルイ島へ、

島中央のサン・ルイ・アン・リル通りを歩く。

サン・ルイ・アン・リル通りはアンティークの店やしゃれた小物屋さんやシックなカフェが並ぶ通り。

シュリー橋を渡ってサン・ルイ島を抜け、

アンリ IV 世通りを北東へ、

バスチーユに到達。

バスチーユ広場から少し北東向き (と思う) に入る方向の路地の入口に、これまでも何度か訪れ

⁵ 原題は“Les Amants du Pont-Neuf”で、日本語はこれに忠実なのだが、英語題名は“The Lovers on the Bridge”と味気ない。もっとも The Lovers on the “New Bridge”でも大差なく味気ないが。

たことがあるクスクスの店がある。店の前に立ったら主人が出て来てまだだと。7 時開店らしい。それまで向いのカフェでビールを飲んで過ごす。7 時過ぎになりクスクスにありつく。どの味を試したか忘れたが、今回もまた大満足。ビールのせいであまり食べられなかったのが残念だったが。

帰りは、確かメトロ 1 号線に乗り、乗り継いでホテルの近くの 2 号線 Anvers の駅からホテルへ。

9月25日(木) 快晴

朝食はホテルでとらず近所のカフェを試してみた。入ったカフェは、たぶん別のホテルの朝食を兼ねる場所で、何も言わなければ、大きめの金属製のトレーにバゲットとクロワッサンが乗っけられているだけの実にシンプルなもの。いかにもパリらしい、ということなのだろう。それとカフェ・オーレ。これだったら、きっと、泊まっているホテルの朝食と同じだろう。

空 港には昼前に向かえばよく、少しく時間があった。今回はまだパリの地図を買っていない。系統立てて集めているわけではないのだが、以前から訪れた土地の地図を買うのが癖になっている。パリは何度か来ているのでいろんな地図を持っている。そこで今回も地図を買うことにして、向かうは昨日行ったシテ島からサン・ミッシェル橋を南に渡ったところにある本屋さん。以前偶然入って、地図が豊富に取り揃えられていることを知っていた。

メトロ 2 号線の Anvers 駅から次の駅 Barbés Rochechouart で 4 号線に乗り換え、サン・ミッシェル駅で降りる。地上に上がってみると当の本屋はまだ開店していなかった。まだ 9 時前だ。あきらめかけたが歩道上の売店で最新のパリ市内地図をみつけて買った。「最新の」の意は、この地図には駐輪場の位置が載っている。僕は使う機会はないが⁶。

⁶ (http://www.cahierdeparis.com/1_article_1070 より転載) パリ市のレンタル自転車サービス「Velib」開始：1年以上も前から話題になっていたパリ市のレンタル自転車サービス「Velib」(ヴェリブ)がこの7月15日から遂にレンタル開始となりました。自転車を意味する Velo と自由を意味する Libre をくっつけた造語のようです。パリの 750 箇所専用の駐輪場があり、全部で 10,648 台が貸し出されているというから、気合いの入れようが分かりますよね。サービス開始から 4 日たった今、パリの街には、渋いグレーの Velib 号を乗り回す人がちらほら。なかなかの人気のようです。

金額は前もって登録する必要があり、1年登録料が29ユーロ、1週間5ユーロ、1日1ユーロとなかなかお得。それに毎回の使用料がかかりますが、最初の30分は無料で、その後30分延長するごとに1ユーロの追加になります。自転車専用道があつてないようなパリをスイスイ走るのは、ちょっと旅行者向けではないかもしれませんが、24時間無休のこのサービス、知っているのと損はないかもしれませんよ。(2007-07-19)

もう1箇所くらいどこかへ行こう。ということで、
シテ島を北へ戻り、
メトロのシャトレー駅を越え、
左に曲がりながらアール通りを歩き、
フォーラム・デ・アールへ到達。

アール通りは商店街だが、歩いた9時頃は店はまだ開いていなく、出勤で混み合う車とゴミ収集車に気をつけながら歩く。フォーラム・デ・アールは確か昔の市場の跡だ。広い公園になっているのだが、イマイチ暗い感じがする。地元の人たちの憩いの場所になっているようにも思えない。

最寄りのレ・アル駅で地下鉄に乗り、ホテルへ戻る。荷物を揃えてチェックアウトし、空港までのタクシーを頼む。カウンターを見ると、空港までの相乗りのシャトルタクシーサービスがあったのだが、前日までに予約しておかなければならなかったらしい。

カウンターの男性が次々とタクシー会社に電話をする。つかまらないようだ。聞くと今日は郊外電車 RER がストをしているとか。なんとまあアンラッキーなこと。空港へ向かう皆がタクシーを使うものだから、なかなかないのだ。それでも5件目くらいでようやく確保。5分も経たず Volvo 車が来る。

空港はタクシーが長蛇の列を成して客待ちをしている。そりゃそうだ、いつもは電車へ乗る客を捕まえられるのだから。

13:30 発 AF276 便で東京へ。

9月26日(金) 東京は曇り

朝8時過ぎに成田空港着。

機内で観た映画は『マリと子犬の物語』(2007: 船越栄一郎、宇津井健、小野武彦、高嶋政信、松本明子)。地震に見舞われ全村避難となった村に残された母犬の奮闘を描いた映画。確か新潟県中越地震のときの実話だった。

「欠航」なんて初めての経験だった。いい経験をしたとは思わないが、こんなこともあり得るのだと知っておくこととなった。ディズニーランドのシェラトンへ行くかどうか分からないが、S さんとは知り合いになれた。S さんはその後年末に空爆下のイスラエルに行ったとのこと。運悪く会えていないが、そのうち一緒に食事でもしよう。